

『高貴なモーリンガー』におけるミンネザングの受容について —ヴァルター L 72, 31 を中心に—

伊藤亮平

0. はじめに

14世紀頃に成立したバラード『高貴なモーリンガー』 „der edle Moringer“ (以下『モーリンガー』と表記する)は、伝承状態に鑑みて、中世後期において比較的広く流布していたと思われる作品である。またこの作品は、ミンネ歌人ハインリヒ・フォン・モールンゲン Heinrich von Morungen やゴットフリート・フォン・ナイフェン Gottfried von Neifen を連想させる人物が登場する他、作中でヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァーデ Walther von der Vogelweide のリート L 72, 31 が引用されるなど、ミンネザングとの関連性が深い作品である。

確かにミンネザングとの関連性は、この作品を特徴づける大きな要因である。ただし、『モーリンガー』の作者はヴァルター L 72, 31 を一部書き換えており、ミンネザングとは一線を画す内容に変更している。さらに作中では、城に泊めてもらうための返礼としてモーリンガーはこのリートを披露するのだが、返礼の為に歌う歌とはおよそ似つかわしくない内容であり、作中の場面とリートの内容が合致していない。この点に関して、先行研究で指摘されているものの、これまで『モーリンガー』が着目されたのは、主にモーリンガーとモールンゲンとの関連性についてであり、作中におけるヴァルター L 72, 31 の意義については深く論じられてこなかった。

『モーリンガー』の作者は、一体どのような意図をもってヴァルターのリートを引用、改変したのだろうか。そもそも作者は、ヴァルターのリートをミンネザングとして自身の作品に引用したのだろうか。本論では、『モーリンガー』とヴァルター L 72, 31 との比較を中心に、このバラードにおけるミンネザング受容を考察し、作者の創作態度の一端を探る。

1. 『高貴なモーリンガー』の粗筋

まずは、『モーリンガー』の内容を概観したい。粗筋は以下の通りである。

信仰心の篤い高貴なモーリンガーは、聖トマスの国へ巡礼する事を思い立つ。そこで、彼が巡礼している7年の間、妻を守ってくれるよう若きナイフェンの殿に頼む。巡礼に旅立って7年目、夢の中で天使がモーリンガーに語りかける。天使は、モーリンガーの妻とナイフェンの殿が結婚しようとしていることを伝える。悲嘆にくれたモーリンガー

は、聖トマスに助けを求め再び眠りに落ちる。目を覚ますと彼は、自分の故郷の水車小屋にいることに気づく。水車小屋の主人から、ナイフェンと自分の妻が今日結婚することを知ったモーリンガーは巡礼者に扮して城へ向かう。城内の人は、その巡礼者がモーリンガーであることに気付かず、彼を城へ迎え入れる。夜にナイフェンは、巡礼者姿のモーリンガーに宿泊の返礼として歌を歌うよう命じる。モーリンガーの歌を聞いた奥方は、歌の褒美としてモーリンガーにワインを入れた杯を渡すように家来に頼む。家来からワインを受け取ったモーリンガーは、杯に結婚指輪を入れ、再び奥方に渡すように家来に頼む。手渡された杯を見た奥方は、杯に指輪が沈んでいるのを見つける。その指輪を見た奥方は、巡礼者が夫のモーリンガーであることに気づく。奥方はモーリンガーに自分の貞節さを訴え、ナイフェンの殿は自分の首をはねるよう申し出る。しかし、モーリンガーは自分の娘をナイフェンの殿の妻に娶らせ、その一方で自分の妻を鞭打つことを約束する。

『モーリンガー』の物語は、インドへの聖トマス巡礼と故郷への帰還を主軸としている。この物語は、グリム兄弟編纂の『ドイツ伝説集』 „Die Deutsche Sagen“ (1816) にも収録されており、また本論の冒頭でも触れたように、写本や印刷本の伝承状態から推測して、比較的流布した作品であると思われる。次に『モーリンガー』の伝承状態を簡単に触れたい。

2. 『高貴なモーリンガー』の伝承

『モーリンガー』は、14世紀頃に成立した作者不詳の作品である。1節は7行の4歩格から成り、全40節(280行)である。楽譜は残されておらず、メロディーは不明である。このバラードは4つの写本および8つの印刷本に記録されている。これらは1459年から1542年にかけて作成された。なおカール・ラッハマン Karl Lachmann は1493年に成立したバンベルク印刷本 Bamberger Druck に x、1542年に成立したヴァイセンホルン写本 Weißenhorner Handschrift に y という略字記号を付けている。¹

3. 『高貴なモーリンガー』と『奇跡についての対話』

『モーリンガー』は2つの文学作品を典拠にしている。² ひとつは『奇跡についての対

¹ なお、シュヴァイクレはヴァイセンホルン写本の成立を1536年としている。Vgl. Schweikle, Günther (Hrsg., Übers., und Komm.): Walther von der Vogelweide. Werke. Gesamtausgabe. Mittelhochdeutsch/Neuhochdeutsch. Band 1: Spruchlyrik. Stuttgart (Reclam) 1994. Band 2: Liedlyrik. Stuttgart (Reclam) 1998, S. 611.

² Vgl. Satmmler, Wolfgangh (Begr.) / Ruh, Kurt (Hrsg.) / Langosch, Karl (Bearb.): Die deutsche Lieteratur des Mittelalters Verfasserlexikon. Band 6. Völlig Neubearb.

話』 „Dialogus miraculorum“³ に登場する『ゲラルドゥス・フォン・ホーレンバッハ』 „Gerardus von Hohenbach“ (以下『ゲラルドゥス』と表記する)の話であり、もうひとつはヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデのリート L72, 31 である。⁴ フリードリヒ・フォークト Friedrich Vogt が 1887 年に既に指摘しているように、『モーリンガー』と『ゲラルドゥス』の粗筋は酷似している。⁵『ゲラルドゥス』の粗筋は以下の通りである。

聖トマスを深く信仰していた騎士ゲラルドゥス・フォン・ホーレンバッハは惜しみなく人々に施しを与えていた。あるとき、一人の巡礼者に扮した悪魔がゲラルドゥスに一晚泊めてくれるよう頼む。ゲラルドゥスは巡礼者を泊めただけでなく、彼に外套を与える。翌日、巡礼者は跡形もなく消え去り、ゲラルドゥスの妻は悪魔に騙されたと彼をとがめる。それでもなお、ゲラルドゥスの信仰心は篤く、聖トマス教会のあるオリエントへ巡礼することを決意する。出発の際、彼は金の指輪を割り、その半分を妻に渡す。そして、5 年間待って自分が戻ってこなかったら、他の男と結婚してもよいと伝える。困難な旅の末、聖トマス教会にたどり着くが、その日が丁度出発して 5 年目であった。ゲラルドゥスが嘆いていると、以前外套を与えた巡礼者が側に立っているのに気付く。ゲラルドゥスは彼を悪魔だと思い、自分を故郷へ連れて帰るように頼む。気が付くと、その日の晩に彼は自分の屋敷の前に立っており、ゲラルドゥスはよそ者の異教徒の姿に扮して屋敷に入る。屋敷では丁度妻とその婿が宴会を催している最中であった。花嫁である妻から飲み物を手渡されたゲラルドゥスは、それを飲み干すと半分の指輪を杯に入れて杯を返す。杯の指輪を見た妻は、そのよそ者が自分の夫であることに気付き、婿に別れを告げる。しかし、ゲラルドゥスは婿に敬意を表し、もう一晚泊まるようお願いする。

『モーリンガー』も『ゲラルドゥス』も、インドへの聖トマス巡礼の旅と故郷への帰還を物語の格子としている。聖トマスは、『ヨハネの福音書』第 20 章 24 節において、キリストの復活を疑い、キリストが槍で刺された脇腹の傷に指を入れる、「不信のトマス」というエピソードが最も有名である。とはいえ、その他のエピソードは新約聖書においてはそれほど多く語られていない。

しかしながら、聖トマスが布教のためにインドに赴き、その地で殉教したというエピソード

Auflage. Berlin (Walter de Gruyter), 1987, Sp. 689.

³ カエサリウス・フォン・ハイスターバッハ Caesarius von Heisterbach によって書かれた、奇跡にまつわる修道士と修練士の対話集。修練士の問いに対して、修道士が例を挙げて説明し、最後に教訓を述べるという形式をとる。1219-1223 年頃に成立したと推定される。『ゲラルドゥス』は第 8 巻の 59 番目の話として登場する。

⁴ b 写本では、ラインマル・デア・アルテ Reinmar der Alte のリートとして記録されており、このリートをラインマル作とする説もある。

⁵ Vgl. Vogt, Friedrich : Die edele Moringer. in: Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur (12) 1887, S. 431-453, hier S.433f.

ードは『新約聖書外典』の『トマス行伝』⁶ や、ヤコブス・デ・ヴォラギネ Jacobus de Voragine の『黄金伝説』 „Legenda aurea“⁷ に描かれており、中世において聖トマスとインドの関わりはなじみ深く、人口に膾炙したものであった。

『モーリンガー』において、ミネ歌人のモールンゲンが取り上げられるのは、名前の類似性もさることながら、モールンゲンの伝記も大きく関係している。そこで、次節では『モーリンガー』とモールンゲンとの関連性を歴史的資料に即しつつ言及したい。

4. 『高貴なモーリンガー』とモールンゲンの関連性

『モーリンガー』の先行研究において、これまでモーリンガーのモデルの特定に関心が注がれてきた。そしてそのモデルとは、ミネ歌人のモールンゲンであると考えられてきた。その根拠として主に、①13世紀に作成されたマイセン伯の古文書、②16世紀頃に発見されたライプチヒの聖トマス教会の記録、③B写本とC写本に描かれているモールンゲンの紋章とコンラート・グリュエネンベルガーの『紋章の書』、以上の3点が挙げられる。

モールンゲンは、12世紀から13世紀にかけて、東部中央ドイツで活動し、ディートリヒ・フォン・マイセン伯 Markgrafen Dietrich von Meißen の古文書 (1217もしくは1218年成立)に記録されている Hendricus de Morungen と同一人物だと推測されている。⁸ その記録によると、モールンゲンはマイセン伯から年金を支給されるものの、それをライプチヒの聖トマス教会に寄贈したとされている。⁹ また16世紀頃に聖トマス寺院で発見された記録によると、Heinricus de Morgener なる人物がインドの聖トマス寺院へ赴き、1222年に亡くなったと記されている。¹⁰

また、ヴァインガルト写本 Weingartner Liederhandschrift (B写本) と大ハイデルベルク写本 Große Heidelberger Liederhandschrift (C写本) には、モールンゲンの人物像とともに紋章が描かれている。B写本の紋章にはムーア人が(図1)、C写本の紋章には星と月が描かれている(図2)。これらに類似した紋章は、15世紀後半に成立したコンラート・グリュエネンベルガー Konrad Grünenberger の『紋章の書』 „Wappenbuch“ に見られる。¹¹ 『紋章の書』の362枚目の下段の一番左にはムーア人の顔が描かれた紋章があり、

⁶ 3世紀頃までには、シリアで成立していたと推定されている。荒井献編：新約聖書外伝（講談社）1997年、506頁参照。

⁷ 1267頃に書かれたと推定されている。Vgl. Verfasserlexikon. Band 4, a. a. O., Sp. 453-456.

⁸ Vgl. Verfasserlexikon. Band 3, 1981, a. a. O., Sp. 804f.

⁹ Vgl. Ebd.

¹⁰ Vgl. Ebd. また以下の論文に詳しい。Menhardt, Hermann: Zur Lebensbeschreibung Heinrichs von Morungen. In: Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur (70), 1933, S. 209-234.

¹¹ Vgl. Rüter, Hanno: Der Mythos von den Minnesängern. Die Entstehung der Moringen-, Tannhäuser-, und Bremberger-Ballade. Köln (Böhlau) 2007, S. 134.

上部に„Her Hainrich von Möringen“ と記されている (図 3)。また 363 枚目の上段の一番右には星と月をかたどった紋章が描かれ、上部に„Der Edel möringer, der zuo Lips begraben litt“と書かれている (図 4)。



図 1



図 3



図 2



図 4

はたして、古文書に記録されている Heindricus de Morungen と Heinricus de Morgener がミンネ歌人のモールンゲンなのかどうか、またこの人物が聖トマス巡礼のために実際にインドに行ったのかどうかは、推測の域を出ることができない。しかし、いずれにせよ『モーリンガー』の作者は、モールンゲンに関する記録と『ゲラルドゥス』に関する知識を持ち合わせていた可能性は高く、またミンネザングを愛好する文学的素養の高い人物だったと推測される。作者が、モールンゲンのリートを知っており、それらのリートが、貴婦人に対して愛を注ぎ、報われない婦人奉仕を嘆く一連の恋愛詩に属していた、そしてヴァルター L 72, 31 もその恋愛詩群の内のひとつであったという認識があったとしても不思議ではない。

なお b 写本において、L 72, 31 はラインマルのリート群の中に記録されている。さらこのラインマルのリート群は、モールンゲンのリート群に続けて、しかもラインマルの名が記されずに記録されている。そして、モールンゲンのリート群とラインマルのリート群との間はおくわずかであるため、b 写本の読者はこのリートをモールンゲン作とみなした可能性もあることをフォルカー・メルテンス Volker Mertens は指摘している。¹² 無論メルテンスの指摘はありうることであり、この点においてモールンゲンとヴァルター L 72, 31 との関連性は全くないと言い切ることはできない。

しかしながらヴァルター L 72, 31 は、後述するが、韻律こそ『モーリンガー』に類似しているものの、『ゲラルドゥス』とも関連性は特に見られない。さらにはヴァルター L 72, 31 の内容は、このバラードとそれほど合致しているとは言い難い。

では、ヴァルター L 72, 31 は作中においてどのような意味を持つのだろうか。この点について、次に『モーリンガー』とヴァルター L 72, 31 との比較を通じて考察したい。

5. 『高貴なモーリンガー』とヴァルター L 72, 31

モーリンガーは、城内に泊めてもらうための返礼として、歌を歌うように若きナイフェンに命じられる。¹³ その時に歌ったのがヴァルター L 72, 31 である。使用されている語彙などに鑑みて、『モーリンガー』の作者は b 写本に記録されているバージョンを参照した可能性が高い。¹⁴ 『モーリンガー』の詩節と b 写本に記録されている詩節は以下の通りである。

¹² Vgl. Mertens Volker: Alte Damen und junge Männer. — Spiegelungen von Walthers ‚sumerlaten-Lied‘. In: Walther von der Vogelweide. Hamburger Kolloquium 1988 zum 65. Geburtstag von Karl-Heinz Borck. Hrsg. von Jan-Dirk Müller und Franz Josef Worstbrock. Stuttgart (S. Hirzel) 1989, S. 197-207, hier S. 198.

¹³ 第 29 節 1-7 行。

¹⁴ Vgl. Verfasserlexikon, Band 6, a. a. O., Sp. 690.

Der edle Moringer ¹⁵	Walter L72, 31 (b 85) ¹⁶
<p>30</p> <p>Ein langes schweygen hab ich gedacht So wil aber singen als ee</p> <p>Darzu haben mich die sch^enen frawen bracht</p> <p>Die m^egen mir woll gehelffen mee So bit ich dich du iunger man Rich mich an der alten brawt Vnd schlach mit deiner lauten¹⁷ an.</p> <p>31.</p> <p>Was ich schaff so bin ich alt Dauon so iunget sie nit vill Das mir mein bart ist so graw gestalt Das sie ein iungen haben wil Vor was ich herr yetz bin ich knecht Das ist mir auff diser hochzeyt Ein alte schussel worden recht</p>	<p>1.</p> <p>Langez swigen hêt ich mir gedâht nû muoz ich singen aber als ê. dâr zuo hânt mich schoene vrowen brâht, sie möhten mir gebieten mê. Swaz ich singe oder in gesagen, iedoch sô bitte ichs allesament gemeine, daz sie den mînen kumber clagen.</p> <p>3.</p> <p>Bin ich in ir dienste worden alt, dâ bî sô junget sî niht vil. lîht ist mir mîn hâr alsô gestalt, daz si einen jungen haben wil. Nû helf iuch got, her junge man, daz ir mich rechent an der alten brût, und slâht mit summerlatten dran!</p>
<p>30</p> <p>長い間黙っておこうと思っていたが、 今私はまた以前のように歌おう。 そのように美しい婦人方は私を向かわせたの だ。</p>	<p>1.</p> <p>長いこと黙っておこうと思っていたが、 今私はまた以前のように歌おう。 そのように美しい婦人方は私を向かわせた のだ。</p>

¹⁵ テキストは以下の版より引用した。Röhrich, Lutz / Brednich, Rolf Wilhelm (Hrsg.): Deutsche Volkslieder. Texte und Melodien. Band 1. Erzählende Lieder. Balladen, Schwänke, Legenden. Düsseldorf (Pädagogischer Verlag Schwann) 1967. この版は、1515年にヨープスト・グートクネヒト Jobst Gutknecht によって印刷された版に基づいている。以下、引用は詩節番号と行数を示す。

¹⁶ テキストは以下の版より引用した。Cormeau, Christoph (Hrsg.): Walther von der Vogelweide. Leich, Lieder, Sangsprüche. 14., völlig neubearbeitete Auflage der Ausgabe Karl Lachmanns mit Beiträgen von Thomas Bein und Horst Brunner. Berlin (Walter de Gruyter) 1996. 以下、本論では b 写本に記録されているバージョンを引用する。

¹⁷ ギュンター・シュヴァイクレ Günther Schweikle は、登場人物の若きナイフェンの殿をゴットフリート・フォン・ナイフェンと仮定し、ミンネ歌人である彼に合わせて、「若枝の鞭」„summerlatten“から「リュート」„laute“に書きかえられたと推測している。Vgl. Schweikle, Günther (Hrsg., Übers. und Komm.): Reinmar. Lieder. Stuttgart (Reclam) 2002, S. 388.

<p>彼女たちが私のことを十分に助けてくださいますように。</p> <p>私はお前をお願いする、若者よ、 老いた花嫁に対して私の仇をとってくれ、そして彼女をお前のリュートで打ってくれ。</p> <p>31</p> <p>私が何をしようとも、 私はもう年老いてしまった。 彼女もそう若くはなくなったのだが。 私の髪はすっかり白くなってしまったので、 彼女は若い男を求めるのだ。 以前の私は主だったが、今では家来だ。 だから私には婚礼で 古い皿が出されるのだ。</p>	<p>彼女たちはもっと多くのことを私に命じられるかもしれない。</p> <p>私が彼女らに歌い、語ることは何であれ、 私の苦しみを嘆いてくれるよう、 ただそれだけを皆さん全員をお願いしたい。</p> <p>3.</p> <p>彼女に仕えているうちに、私は年を取り、 彼女もまた若くはなくなってしまった。 きっと私の髪は、彼女が若い男を欲しが るような様子になったのだろう。 若い男の方よ、神のご加護がありますよ うに。年寄りの花嫁に対して、 私の仇をとってくれ、 そして彼女を若枝で打ってくれ。</p>
--	---

b 写本に記録されているヴァルター L72, 31 は全 3 節から成り、¹⁸ その内、第 1 節と第 3 節が『モーリンガー』に引用されている。両者の韻律は類似しており、『モーリンガー』もヴァルター L 72, 31 も、1 節 7 行の 4 歩格を基調とし、¹⁹ 脚韻は a b a b c x²⁰ c である。しかし韻律が類似しているとはいえ、ヴァルターのリートは報われない愛を歌うミンネザングである。しかも無慈悲な女性に対する復讐、それも鞭打ちという過激な内容で幕を閉じるリートである。²¹ カール・ビュッツラー Carl Bützler が指摘しているように、このリートは城内の人々を喜ばせるために歌われるリートに全くふさわしいものとは言い難い。²² さらに、『モーリンガー』の作者はヴァルターのリートの内容を変更しているものの、それが宴のための歌に仕立てるためでないことは明白である。

ヴァルター L 72, 31 において、『モーリンガー』と関連付ける事が出来るのは、人に促されて歌い始める冒頭部（「長い間黙っておこうと思っていたが、/ 今私はまた以前のよう

¹⁸ C 写本では全 5 節が記録されている。

¹⁹ ヴァルター L 72, 31 の 1, 3 行は 5 歩格である。

²⁰ x は無韻を表している。

²¹ ヴァルター L 72, 31 は A 写本、C 写本、E 写本、b 写本に伝承されている。この内、A、C、b 写本では、この詩節が最終節となっている。しかし、E 写本ではこの詩節が全 5 節の内、第 3 節として記録されている。

²² Vgl. Bützler, Carl: Heinrich von Morungen und der edele Moringen. In: Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur (79) 1942, S.180-209, hier S.194.

に歌おう)、及び「老いた花嫁」„alte brüt“という表現である。²³ ミンネザングで「花嫁」という語が使用されるのは稀である。その「花嫁」を「年老いた」と表現し、さらには自分に代わってその花嫁に復讐するよう若い男に頼むと言う過激な表現は、当然『モーリンガー』の作者の注目を引いたことであろう。

なおヴァルター L 72, 31 に見られる批判は、自身の婦人奉仕に正当に報いようとしないう女性に対して向けられている。長い婦人奉仕の内に自分は年老いてしまった、即ちそれほど長きに渡って誠実に奉仕を続けてきたとヴァルターは主張する。それは同時に女性も年を取ることを意味する。このことに気付かず、そして歌人の誠実な奉仕にも気にも留めずに、若い男を求めるような女性をヴァルターは語気鋭く攻撃する。

女性批判という点において、ヴァルター L 72, 31 は『モーリンガー』と呼応する面がある。ただし、モーリンガーの場合、自分の留守中に、妻の世話を任せた若い家来と結婚しようとする妻に対して批判の目が向けられており、ヴァルターとは批判の対象が異なっている。そして、年を取るというモチーフは、『モーリンガー』では巡礼の月日の長さを表しており、長きに渡る誠実な婦人奉仕というミンネザングの要素は影を潜める。

また L 72, 31 においてヴァルターは、女性の名誉は歌人によって支えられているのだと主張する。つまり、これまで女性が名声を得ることが出来たのは、歌によって女性を称賛する歌人がいるからこそであり、歌人が歌うのを止めれば、その女性を讃える人がいなくなるため、女性はこれまでの名声を保てなくなるというのである。ここでのヴァルターの意図は、歌人である己の存在価値を示すと同時に、誠実に奉仕を行っているにも拘わらず、自分に対して冷淡な態度を取る女性に向かって、然るべき振舞いをするようにという忠告を発することにある。ヴァルターのこの主張は L 72, 31 の第 2 節 (b 86) で最も明確に述べられている。

私が彼女に名声をもたらしたのだ。 / 彼女はすっかり気位が高くなっているが、 / もしも歌が私を見捨てたのなら / 彼女の立派な名声は失われてしまうのかどうか、私にはわからない。(ヴァルター L 72, 31 第 2 節 (b 86) 4-7 行)

ところが『モーリンガー』では、歌人としての自己意識が色濃く現れているこの第 2 節が省かれている。さらに作者は、ヴァルターのリートの後節 (5-7 行) を入れ替えている。そして第 31 節では、バラードの内容に合わせて後節を全く別のものに変更している。第 30、31 節の後節の内容は暗示的である。しかし『モーリンガー』の聴衆ならば、それがモーリンガーの妻の再婚を含意しているのか明らかであろう。このように『モーリンガー』の作者は、ヴァルター L 72, 31 における婦人奉仕の要素を省き、女性批判の対象を婦人奉仕に対して冷淡な女性から、モーリンガーの妻へと変更する。こうして、『モーリンガー』

²³ A、C、E 写本では「花嫁」„brüt“ではなく、「肌」„hüt“と記録されている。

で引用されたヴァルター L 72, 31 は、ミンネザングの要素を消失する。

夫の留守中に若い男と結婚しようとする妻に対する批判と並び、モーリンガーの歌の意図は、自分の正体がこの城の主人であるモーリンガーであることを周囲の人々に気付かせることにある。上述したように『モーリンガー』の聴衆ならば、無論それは容易であろう。しかし、歌謡の世界に目を転じてみれば、歌謡の世界の登場人物たちは、モーリンガーが歌う暗示的な歌に込められた意味を理解できただろうか。「モーリンガーの歌を聞き、奥方の美しい瞳は悲しみに曇った」 „Do die fraw nu das²⁴ erhört / Betrübt waren ir augen klar“ (第 32 節 1-2 行) と述べられていることから、ひょっとすると奥方は巡礼中の夫の事が胸中に浮かび、彼の歌う歌の意味に感づいたかもしれない。とはいえ、奥方は巡礼者の正体に気づくまでには至っていない。何故なら、この歌が花嫁を感動させる内容ではないという不自然さはあるものの、²⁵ 奥方はワインを入れた杯を歌の褒美として与えており、リートの本質の意味に気を留めている様子はいかたがえな。奥方が巡礼者の正体に気が付くのは、褒美として与えた杯が手元に返され、その中に夫の指輪を見つけたときである。²⁶ 従って巡礼者の正体を明らかにする決定的な証拠は、杯に沈んだ指輪であって、モーリンガーが歌った歌ではない。一見するとリューターが言うように、この歌を作中に取り入れる必然性は感じられない。²⁷

しかし作者は、「宿泊の返礼として歌を歌う」という、『ゲラルドゥス』にはないエピソードを挿入し、敢えてモーリンガーが歌を歌う場面を設けている点から、作者にとってこの歌が『モーリンガー』において重要な位置を占めることは言うまでもないだろう。

この歌の意義のひとつは、この歌が「指輪」と「杯」を結びつける媒介となっている点にある。このバラードにおいて、自分の城に到着したモーリンガーと奥方のやり取りは基本的に家来を介して行われている。モーリンガーは城に入る際に門番に取り次ぎを頼んでおり、城の滞在を認める奥方の言葉は、その門番によって伝えられている(第 22 節 1 行-第 23 行 7 行)。また奥方は、歌の褒美である杯をモーリンガーの前に置くものの、彼とは言葉を交わしていない(第 32 節 3-4 行)²⁸。またモーリンガーは家来に杯を再び奥方に返すよう頼んでいる(第 34 節 1-4 行)。指輪を見て、巡礼者の正体に気が付いた奥方は彼の前に跪き、そこでようやくモーリンガーに直接語りかける。

Do des edlen Ritters fraw	高貴な騎士の奥方は
Das fingerlein in dem becher an sach	杯の中にある指輪を見つけた。
Sie begund es auch eben achawen	奥方はそれをじっと見つめた。

²⁴ この指示代名詞 *das* は、具体的にはモーリンガーの歌を指す。

²⁵ Vgl. Bützler, a. a. O., S. 194.

²⁶ 第 36 節 1-5 行。

²⁷ Vgl. Rüter, a. a. O., S. 105.

²⁸ ヨープスト・グートクネヒトの版では、„setzen“ の過去形 „satzt“ となっているが、バンベルク写本では「送る」„senden“ の現在形 „sendet“ となっている。

Nun mügent ir hören wie sie sprach	さあ、彼女が何と言ったかお聞きください。
Mein herr der Moringer ist hie	「モーリンガー様がここにいらっしゃるのだわ」
Auff stund die fraw gar zuchtigklich	奥方はしとやかに立ち上がると、
Vnd viel fur jn auff ire knie.	彼の前に跪いた。
Seyt mir wilkumm mein liebster herr	「よくお戻りになりました、私の愛しい
[…]	旦那様、 […]

(第36節1行-第37節1行)

この場面で初めて両者が直接会話する場面が描かれる。この点において、モーリンガーの歌は、両者の距離の隔たりを狭める役割を担っている。

そして、この歌のふたつ目の重要性はモーリンガーの正体を示唆するに留まっている点にこそある。モーリンガーと奥方を結び付ける直接の契機はあくまで杯に沈んだ結婚指輪であり、あくまで彼の歌はその前段階に過ぎない。巡礼者が実はモーリンガーであること、それが結婚指輪によって明らかにされることがこのバラードの中心となるように、この歌が配置されている。つまり、この歌によってモーリンガーの正体は決して明らかにされてはならないのである。

『モーリンガー』の作者は、モーリンガーの正体が明かされる場面をより劇的に演出するために、ヴァルターのリートに暗示的な要素を加味している。さらには、ヴァルターのリートはこのバラードの結末をも暗示している。モーリンガーとの約束を破り、奥方と結婚しようとした自分の首を刎ねるよう訴えたナイフェンに対し、モーリンガーは次のように答えてこのバラードは結末を迎える。

Do sprach der edel Moringer	高貴なモーリンガーは言った。
Junger herr von Niffen es sol nit sein	「若きナイフェンの殿よ、そのようなことはしない。
Vergest ein teyl der ewern schwer	お前の苦しみは忘れるがよい、
Vnd habent euch die tochter mein	お前には私の娘を与えよう。
Vnd lassent mir die alten brawt	年老いた花嫁は私に任せてもらいたい。
Mit der kan ich mich wol verrichten	彼女をどうすればよいかよくわかっている。
Jch wil ir selber pern ir hawt.	私は彼女の肌を鞭打とう。」

(第40節1-7行)

『ゲラルドゥス』の結末と比較すれば、ゲラルドゥスもモーリンガーも、妻の再婚相手である若い男に寛大な態度を見せている。それどころか『モーリンガー』ではその様相を

さらに拡大させている。しかし、『ゲラルドゥス』では妻に関して特に言及されない一方、²⁹対照的に『モーリンガー』では罰を与えるというように、妻に対する処遇が厳格化している。³⁰『モーリンガー』の作者は、一見するとヴァルター L 72, 31 をバラードの展開に沿うように自由に改変しているように見える。しかし、結末においてはヴァルターの歌に合わせて『ゲラルドゥス』の内容を変更している。つまり、最終的にこのバラードの結末を決定付けているのは、ヴァルターのリートに他ならないのである。ナイフェンの殿には自分の娘を嫁がせ、奥方に鞭打ちの罰を与えるという、いささか理不尽に思われるような結末であるが。

6. 結語

『高貴なモーリンガー』の作者は、ヴァルターやモールンゲン、ナイフェンなどのミネザングや『奇跡についての対話』に関する知識を持つ、文学的素養のあった人物であったと思われる。また『モーリンガー』において、ヴァルター L 72, 31 を引用する際に、このリートをミネザングとして認識していた可能性は大いに考えられる。しかし L 72, 31 をミネザングだからという理由で自身の作品に引用した可能性は低い。また、ヴァルターのリートの内容と韻律がバラードに呼応する側面があるというのみで引用したとは考えにくい。

ヴァルターのリートで人目を引くのは、誠実に仕える男を気にも留めず、若い男に夢中になるような不誠実な女性を鞭打ちによって罰せよという、ミネザングとしては特異な過激さにある。それは、後世においても同じだったのであろう。『モーリンガー』の作者もおそらくその点に着目した可能性は十分に考えられる。しかし、ヴァルターのリートの場合、年を取る女性というモチーフの背後には、それほど長く女性に仕えてきたというミネ奉仕を行う男の誠実さの主張があった。それに対して『モーリンガー』の作者は、そのようなミネザングの要素を削除し、代わりに、主人との約束を破り、若い男と結婚しようとする奥方に対する批判を強調している。ただし作者は、そのような批判をバラードの世界では示唆するに留めている。つまり奥方に対する批判は、ヴァルター L 72, 31 を作中に引用することによって実際には露骨に表現されているが、バラードの世界の登場人物たちはそれを理解することができない。またこのリートには巡礼者に扮したモーリンガーの正体も暗示されているのだが、この点に関しても作中の登場人物は知ることはない。

²⁹ 巡礼前にゲラルドゥスは妻に向かって、もしも5年間待って自分が帰ってこなければ、他の男と結婚してもよいと告げている。

³⁰ バンベルク写本のバージョンでは、モーリンガーは妻を鞭打つという発言はしていない。またこの写本には第41節が記録されている。第41節には、ナイフェンは喜んでモーリンガーの娘を妻にし、モーリンガーの奥方も娘も優しく、またナイフェンの殿もモーリンガーも高貴な生まれであったことが記されている。Vgl. Rüter, a. a. O., S. 84.

それら全ては、作中の登場人物に対して暗示的に表現されているに過ぎないのである。

そして引用されたヴァルターのリートでは、妻を鞭打ちによって罰するという、このバラードの結末も明かされている。しかし『モーリンガー』の聴衆は、それが結末であることを知る由もない。つまり、作者はバラードの結末を聴衆に対してもやはり暗示的に表現するに留めているのである。

以上のように作者は、巡礼者に扮したモーリンガーの正体、不誠実な奥方に対する強い批判、バラードの結末をヴァルター L 72, 31 に集約し、それを予め提示している。しかしリートを、その内容とそぐわない場面で披露することによって、この三つの事柄を覆い隠し、あくまでも示唆するに留めることに主眼を置いている。一見すると、ヴァルター L 72, 31 は、その内容が改変されているにも拘わらず、バラードの場面にふさわしくないように映る。しかし、それはバラードの結末をより劇的に演出するための作者の戦略であり、ヴァルター L72, 31 は『モーリンガー』において、韻律や内容の類似に基づく引用に留まらない、幅広い役割を担っているのである。